

## マルコによる福音書 13 章 1 節～13 節

2018 年 4 月 19 日

古本 靖久

1、聖歌 251 番 「カルバリの木にかかり」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 88 ページ）

4、テキストの位置

マルコによる福音書も 13 章に入りました。この福音書では 14～15 章がイエス様の受難、16 章が復活の記事になっています。

13 章には、イエス様の長い説教が書かれており、ご自分の死後に起こる出来事、および終末の出来事が語られています。

終末とは、簡単にいうと「世の終わり」のことです。とても恐ろしいことに感じるかもしれませんが、イエス様が再臨される日のことであり、希望の日ともいえます。

エルサレムにて	月曜日	11:12-14	いちじくの木
		11:15-19	神殿とは
	火曜日	11:20-26	信仰と祈り
		11:27-33	神からの権威
		12:1-12	取り上げられる実り
		12:13-17	神のものは神へ
		12:18-27	生きている者の神
		12:28-34	たいせつなのは愛
		12:35-37	キリストとは
		12:38-40	律法学者批判
		12:41-44	たくさん入れた人
		13:1-8	神殿の崩壊と終末
		13:9-13	弾圧のとき
	13:14-37	終わりの日のこと	
	水曜日	14:1-2	イエス殺害計画
		14:3-9	埋葬準備
14:10-11		ユダの思い	

イエス様は間もなくやってくる弟子たちとの別れの前に、最後の言葉を残します。その言葉を集めたこの章は「小黙示録」と呼ばれますが、わたしたちにどのようなことを伝えるのでしょうか。見ていきましょう。

## 5、節ごとに

### ◆神殿の崩壊と終末

**13:1** (そして) イエス (彼) が神殿の境内を (から) 出て行かれるとき、(彼の) 弟子 (たち) の一人が (彼に) 言った (う)。「先生、御覧ください。なんとすばらしい (いう) 石、なんとすばらしい (いう) 建物でしょう。」

イエス様はエルサレム神殿から出て行かれます。イエス様の時代のエルサレム神殿は、ヘロデ大王によって修築された、当時最も壮麗な建築物の一つであったそうです。修築工事は紀元前 19 年に開始され、紀元前 9 年にはだいたい終わっていましたが、最終的に完了したのは紀元 64 年でした。したがってイエス様が十字架につけられたころは修築工事の最中だったようです。

ガリラヤから来た弟子たちは、改めて神殿のすばらしさに目を留めました。しかしイエス様は、神殿から出て行かれます。この出来事は、イエス様と神殿との決定的な断絶も示しているのかもしれませんが。

**13:2** (そして) イエスは (彼に) 言われた。「(あなたは) これらの夫きな (巨大な) 建物を見て (眺めて) いるのか。一つの石もここで崩されずに他の石の上に残ることはない (だろう)。」

イエス様はここで預言を語ります。ここで「預言」と「予言」との違いを押さえておきたいと思います。「予言」とは未来に起こる出来事を言い当てることです。「明日は雨が降る」ということを予測することなどがそうです。

それに対し「預言」とは、神さまから与えられた (預かった) 言葉を伝えることです。旧約聖書に出てくるエリヤやイザヤなどの預言者は、神さまの怒りなどを民に伝えていきました。イエス様はエルサレム神殿の行く末を伝えます。その背景には、強盗の巣と化した神殿の姿がありました。



エルサレム神殿は、紀元 70 年にローマ帝国によって包囲され、破壊されます。イエス様の預言の 40 年後です。このことから、マルコによる福音書は少なくとも紀元 70 年以降にまとめられたものだという考えもあります。しかし、神殿の破壊を告げる預言はすでに多くの預言者が語っていたこと、またイエス様は単にエルサレム神殿の未来だけを予言したわけではないということをお忘れはいけません。

13:3 (そして) イエス(彼) がオリーブ山で神殿の方を向いて座っておられると、ペトロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレが、ひそかに(自分たちだけで彼に) 尋ねた。

神殿を出たイエス様は、オリーブ山に登ります。しばしばイエス様は山で祈られますが、このときも神殿の方を向いて祈ろうとしていたのかもしれませんが。そこに四人の弟子がやってきます。彼らはイエス様がガリラヤ湖で最初に弟子にした、漁師の四人です。

13:4 「(わたしたちに) おっしゃってください。そのことはいつ起こるのですか。また、そのことがすべて実現(完成)するときには、どんな徴があるのですか。」

大きな自然災害が起こる前、空の色がいつもと違ったり、鳥たちが逃げて行ったりといった兆候が現れることがあります。弟子たちはそのようなことを知りたかったのでしょうか。

このときにはまだ、世の終わりには「裁き」のイメージがあったのかもしれませんが。洗礼者ヨハネは「斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる」と叫びました。裁きの日が来る前に、準備が必要です。だから「その日」を知りたいのです。

13:5 (すると) イエスは(彼らに) 話し始められた。「人に(があなたがたを) 惑わされ(すことの) ないように気をつけなさい。

イエス様は「惑わされないように」と警告します。この警告は、目の前の弟子たちだけではなくすべての弟子たち、また福音書が書かれた時代の教会に対しても与えられています。

13:6 わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『わたしがそれだ』と言って、多くの人を惑わすだろう。

いわゆる「偽予言者」に気をつけなさいということを、イエス様は言われています。弟子たちは、徴を求めました。わたしたちもイエス様の再臨や終末について、何か徴があればと考えます。

今から 45 年前、ノストラダムスの大予言という本が大ベストセラーになりました。1999 年 8 月に人類が滅亡するという予言を紹介し、当時公害問題などで将来に不安を覚えていた人々は、その内容に惑わされていきました。また多くの新興宗教が、世界の終わりを強調しながら勢力を拡大するという現象も、数多くみられます。

**13:7** 戦争の騒ぎ（こと）や戦争のうわさを聞いても、慌て（動転し）てはいけない。そういうことは起こるに決まっている（ものだ）が、まだ世の終わりではない。

しかしイエス様は、戦争が起こっても、また戦争が起こりそうだという噂を聞いても、動転してはいけないと言われます。実際にマルコ福音書が書かれた頃にユダヤ戦争が起こり、エルサレム神殿が崩壊しました。

パウロの手紙を読んでいくと、当時の人々の中には、どうせ世の終わりが来るのだからと先のことを考えずに生きていた人も多くいたようです。たしかに明日、世界がなくなるとしたら、今日一日好きなことをしようとする気持ちもわかります。

でもそれが、すべての終わりではないと言われます。神殿がなくなったとしても、うろたえてはいけないと言われるのです。

**13:8** （すなわち）民は民に（敵対し）、国は国に敵対して立ち上がり、方々に地震があり、飢饉が起こる（だろう）。（しかし）これらは産みの苦しみの始まりである（にすぎない）。

また様々な出来事が起こります。それらは、産みの苦しみの始まりだというのです。弟子たちの前には、これから多くの困難が待ち受けています。それらを通して、何かが産まれるということなのでしょう。

### <前半の箇所から>

ヨハネの黙示録やマルコによる福音書の13章、また旧約聖書のダニエル書など、黙示文学と呼ばれる書物に書かれた内容を強調する人たちがいます。ハルマゲドンや14万4千人という人数、666という数字などを使って、人々を不安に陥れようとするのです。

今日の箇所でも、「エルサレム神殿の崩壊」という預言だけで、人々はパニックになったことでしょう。過越祭には毎年必ず出掛け、信仰の拠り所であった神殿がなくなってしまう。自分たちのアイデンティティが失われてしまうほどの衝撃だったと思います。

しかしイエス様は其中で、「動転するな」と言われます。それは、これらの出来事は、「産みの痛み」だからです。「どんな苦しいことがあっても、わたしはあなたがたと共にいる」。そのような約束が背景にあると、わたしたちはこのイエス様の言葉も聞きやすいかもしれません。しかし不安や恐れがその約束を上回ることもあるのです。

◆弾圧のとき

13:9 あなたがたは自分(自身)のことに気をつけていなさい。(彼らは)あなたがたは(を)地方法院(裁判所)に引き渡され(し)、(あなたがたは)会堂で打ちたたかれる(だろう)。また、わたしのために総督や王の前に立たされて、(る。彼らへの)証しをすることになる(ために)。

イエス様は続いて、弟子たちの身に起こることについて語っていきます。5節にも「気をつけていなさい」という言葉がありました。13章には「気を付けていなさい」が計4回出てきます。ここでは他の人に頼るなどということではなく、周りに起こることだけでなく自分自身に起こることにも目を向けなさいという意味です。

ユダヤ人の地方裁判所や、ユダヤ教の会堂で打ち叩かれるのは、ユダヤ教とキリスト教は対立するからです。また総督や王の前に立つことにもなります。しかしそれは、証しをする大切な機会なのです。

13:10 しかし(そして)、まず、福音があらゆる民(族)に(対して)宣べ伝えられねばならない。

ここでイエス様は弟子たちに対し、彼らの任務が何なのかを伝えます。それは「福音宣教」です。それもあらゆる民族、すなわち全世界に対してです。

捕らえられ、引き渡されることは、とても辛いことです。福音書が書かれた頃、多くのキリスト者はその信仰の故に殉教していました。その死は決して無駄ではないと、イエス様は言われているのでしょうか。神さまのみ心に沿った行為だと、肯定しているのでしょうか。

13:11 (そしてあなたがたが連れていかれ、)引き渡され、~~連れて行かれる~~とき、何を言おう(語ろう)かと取り越し苦労を(あらかじめ思い悩んで)してはならない。そのときには、(あなたがたに)教え(与え)られることを話せ(語れ)ばよい。実は、話す(語る)のはあなたがた(自身)ではなく、聖霊なのだ(から)。

迫害の中を、人は歩むように促されているようにも感じます。しかしこの箇所を別の角度から読むと、「あなたがどんなところに連れていかれようとも、わたしがあなたの口となる」という、神さまの思いと考えることができます。神さまが共にいてくださるという約束です。

わたしたちは決して、自分の思いを伝えるために信仰に入ったのではありません。神さまがわたしたちを通してご自身の栄光を現される、そのお手伝いをするだけなのです。

13:12 (そして) 兄弟は兄弟を、父は子を死に追いやり(引き渡すことがあるだろう。)、  
(そして) 子は親に反抗して(敵対して立ち、彼らを) 殺す(死に渡す) だろう。

黙示的な考えでは、相反する忠誠を誓った結果、家庭内で起こる分裂が、終末に先立つ苦難の一つと数えられてきました。福音書が書かれた時代においても、実際に家庭内でそのような分裂は起こっていたようです。

13:13 また(そして)、わたしの名のため(故)に、あなたがたはすべての人に憎まれる(ことになる)。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は(、その者こそ) 救われる。」

イエス様の十字架に従うとは、それほどの苦難を背負うことです。これを過去の出来事だと、簡単に考えていいのでしょうか。

わたしたちは信仰を告白するとき、多くのことと決別してきたのではないのでしょうか。また他の人と違う方向を向いて、歩かざるを得なくなったことはありませんか。聖書の時代のような敵対関係まではないかもしれませんが、けれども何かを捨てて、イエス様に従っているはずです。そのために憎まれたとしても、耐え忍びなさい、それがイエス様の命令なのです。

### <後半の箇所から>

イエス様はご自分の十字架の後、弟子たちに試練が訪れることを告げます。しかしそれは、すべての民族に福音を伝える機会なのだとされます。

イエス様は近くにいる人たちや、イスラエルの人たちのためだけに遣わされたわけではありませんでした。そうではなく、すべての人が神さまの前で生かされるように、来られたのです。その人たちに神さまの愛を伝えること、それがキリスト者の使命なのです。

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。(ヨハネによる福音書 3章 16~17節)

この言葉が世界に実現するために、わたしたちは遣わされています。

今回の学びはこれで終わります。次回は5月24日(木)10時半からです。「大きな苦難」(マルコ 13:14~27) について学んでいきます。